

# Monthly Report

## リオ五輪 南條教授と大元選手の壮行会を開催



リオでの活躍を誓う南條教授(右)と大元選手

〈目次〉	
リオ五輪 南條教授と大元選手の壮行会を開催	1
ハワイ大学から初めての留学生を受け入れ	2
東京おもちゃショーでボート競技を紹介	3
健康づくり運動サポーター	4
青海省体育科学研究所との協定書を更新調印	5
横川和幸元教授からの報告	6
上海体育学院修士課程修了中野拓也さん	7
第9回七十七銀行陸上競技記録会	8

8月5日からブラジルで開催されるリオデジャネイロオリンピックに出場する全日本柔道女子監督の南條充寿教授と、ボート男子軽量級ダブルスカル代表の大元英照選手(本学平成19年体育学科卒、アイリスオーヤマ株式会社所属)の壮行会が6月29日(水)、学生食堂「なちゅら」を会場に本学の学生や教職員、滝口茂柴田町長はじめ仙南地区2市7町の首長の皆様など約250名が参加し開催されました。

最初に朴澤泰治理事長・学事顧問から「南條教授には、故斎藤先生の遺志を継いできたものを成果としてぶつけて欲しい、そして、仙台大学柔道塾の子どもたちにも夢を与えられるような活躍を見せてほしい。また、大元選手には、自転車事故その他、数々の苦難を乗り越えて勝ち取った悲願の五輪。一緒に出場できなかった須田選手の分も合わせ、決勝を目指して頑張ってほしい」とあいさつ。来賓を代表して滝口茂柴田町長からは「お二人の活躍で、柴田町の名前を世界に発信していただきたい。」と激励の言葉を頂戴しました。

壮行会では、本学の学生や教職員からのメッセージが書かれた日本国旗や、花束が贈呈され、南條教授は「この壮行会でオリンピックなのだという実感が湧いた。一つでも多く金メダルを取らせる環境づくりを残りの期間でしっかり取り組みたい。」とあいさつ。大元選手は「まずは決勝進出が目標。世界のトップに少しでも近づきたい。」とリオ五輪に挑む決意を力強く表明しました。

会の最後には阿部芳吉学長と柔道部約45名がそろって南條教授へ、漕艇部の矢島宏大さん(体育学科2年)からは大元さんへそれぞれリオでの活躍を祈ってエールが送られ、会場は大きな拍手に包まれました。

2人は8月1日にリオに入り、世界の舞台へと挑戦します。



学生や教職員からの応援メッセージが書かれた日本国旗も贈られました  
 (後方左から、朴澤理事長・学事顧問、阿部学長、南條教授、大元選手、滝口柴田町長、半澤同窓会副会長  
 前方左から、月野さん、川越さん、落合さん、小野さん)

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室  
 直通 0224 - 55 - 1802  
 E-Mail kouhou@sendai-u.ac.jp

## ハワイ大学短期交換留学プログラム

### ～ハワイ大学の学生達が初めて仙台大学で研修～

6月3日～13日まで、ハワイ大学教育学部キネシオロジー学科から初めて学部生5名と引率者 おおぼゆきやの大庭有希也先生が来学し、芋煮の調理、書道といった日本文化の体験からベガルタ仙台の泉練習場やKOBOSタジアム施設見学にいたるまで、大変充実した研修が行われました。

2003年12月より毎年本学では、アスレティックトレーナーに興味を持つ学生達を中心に、グローバルな人材養成の一環として運動栄養学科の学生などにも門戸を広げてハワイ大学を訪れては、アスレティックトレーナー研修をし、ビギナーコース・アドバンスコースあわせると22回を数えるほどになりましたが、ハワイ大学から学生が本学を訪れるのは初めてです。この交換プログラムは、2014年のハワイ大学キネシオロジー学科と本学間における基本合意書締結に基づき実現されました。

今回の研修は大きく分けて3つの目的から成ります。第一に日本のスポーツ界におけるアスレティックトレーニング（以下AT）の現状を知る、第二は日本の教育システムについて学ぶ、最後は東日本大震災の被災地の現状を自らの目で見て実際にボランティア活動を行う～です。ただ、こういったことよりも本学の学生がこのプログラムを通してどのように成長できるかという点を最も重視しました。そこで、普段接する機会がないハワイ大学の学生と本学の学生が行動を共にし、コミュニケーションをはかりながら異文化交流や将来について話すことこそ1番重要と感じ、本学にできたばかりの国際交流サークルの学生やハワイ研修に参加した学生を中心に、プログラムへの参加を促しました。10名ほどの本学の学生達は身振り手振りの英語を駆使して一生懸命UH学生と「会話し」、英語と日本語入り混じった賑やかな「語学実践教室」は深夜まで続くなど、彼らは改めて未知なる学びの楽しさを味わったようです。



明成高校で味噌作りを体験するハワイ大からの留学生



女川町での被災地ボランティアにも参加

研修全体は一言で表現しきれないほど豊かな構成で、そのすべてを実現できたのもご協力頂いた先生方・職員の方々のおかげに他なりません。明成高校では調理科の格別なご配慮により味噌の仕込みに参加し、UHの学生達は生まれて初めて日本の伝統的な食材である味噌がどのように日本の和食のなかで息づいているかを学びました。自分たちが調理した食事を同じテーブルで味わいつつ明成調理科の高校生ともすぐに打ち解け、最後はお互いに名残を惜しんでいました。

特にUH学生達の心に残ったのは、女川で健康運動指導を補助した時だったそうです。東日本大震災で住む家や家族を失ってしまった当時のお話を聞き、その想像もつかないような辛さを心に抱えているにも関わらず、楽しそうに運動していた高齢の被災者の姿を目の当たりにし、それぞれの学生達が自分の悲しみとして受け止めつつ、大震災を経てなお希望を失わない姿を忘れることはないでしょう。被災者のお一人が、ご自分の孫くらいの年齢の学生のジョニーさんと「絶対また遊びに来てね」と握手を交わっていた姿がとても印象的でした。

このプログラムを通し、ハワイ大学の学生は様々な人と出会い、日本という国について理解を深めたに違いありません。10日間という短い期間でしたが、一人でも多くのハワイの学生の未来に輝きが増し、本学の学生達が言葉の壁を越えて育まれる友情を通して本当の意味で国際的な人材に成長するよう願っています。たくさんの方々にご協力頂き誠にありがとうございました。今後このプログラムが末永く続き、ハワイ大学キネシオロジー学科との関係が更に深まるよう祈念致します。

(報告：白幡 恭子 講師)

## 「東京おもちゃショー2016」でボート競技をPR

「東北こども博」特別協力先である一般社団法人日本玩具協会が主催する「東京おもちゃショー2016」が、6月9日～12日（一般公開は11日と12日）まで東京都江東区有明の東京ビッグサイトにおいて開催されました。これは国内外のおもちゃを一同に集めた展示会となっています。一般公開日の来場者は1日目が7万2千人、2日目が7万人と2日間の合計で14万人の来場という盛況ぶりでした。その中で子供文化の発展に賛同する企業や団体を集めた「キッズライフゾーン」に今回で5年連続となる本学のブースを出展しました。

今年は、ローイングエルゴメーターによるボート競技体験と、パーテーション掲示として本学PRパネル（「東北こども博」6枚、「ボート競技」8枚の計14枚（その他「東北こども博」報告書を設置））を展示し、出展会場では、阿部肇教授、日下部新助手、学生スタッフ（漕艇部員）3名、千葉勝彦コンサルタント、西塚重良事業戦略室長の合計7名がスタッフとして対応しました。

当日は小学生中心に老若男女がローイングエルゴメーターによるボート漕ぎにチャレンジしていました。1人当たり2分～3分の体験で、1日当たり約460人で2日間合計920人程度と、終始行列が途絶えることなく、終了時間まで体験を待ちわびる人でごった返していました。仙台大学の様々な取り組みに関し、東京を中心としたお子さんやその保護者の方々に理解を深めていただく場として「東京おもちゃショー」は年を重ねるごとに大きな反響を得ています。

（報告：事業戦略室 西塚 重良）



子どもたちにボート体験の指導を行う漕艇部員ら

## 平成28年度 学生ボランティア促進キャンペーンイベントに参加

平成28年6月12日（日）アーツ千代田3331（東京都千代田区）で開催された復興庁主催の「平成28年度学生ボランティア促進キャンペーンイベント“今だからできること～復興の先を見据えて～”」に、健康福祉学科4年木村金次郎、運動栄養学科4年大場萌子、健康福祉学科3年浅井美樹の3名が参加しました。このイベントは、東日本大震災からの復興のさらに先を見据えた取り組みについて、大学生を中心



イベントに参加した本学学生

とした若い世代が考えを発信し合うことで連携を促し、より多くの人々に被災地の復興について考えていただくことを目的とし、今年初めて開催されました。今回は、復興庁が選定した12大学の32名が参加し、交流を深めました。

当日は、各大学の活動について発表し合う座談会や、復興の先を見据えて「今、何ができるのか」を参加者同士で考えるワークショップが行われました。参加した学生たちからは「東北の魅力を発信していくことが復興の先につながる」、「同じ意識をもった今回の参加者が繋がりを深めることで、それぞれの活動が更に良いものになるのではないかな」等、復興支援に携わる学生たちだからこそ考え付く意見が多く挙がりました。

今回参加した3名の学生は、他大学の学生との意見交換の中で、被災地にある大学生の使命を改めて役割を考えることができました。東北・宮城の復興に貢献していけるよう、学生たちとともにこれからも積極的に活動していきます。

（報告：新助手 齋藤 まり）

## 健康づくり運動サポーター認定証授与式 ～新たに33名の学生が健康づくり運動サポーター資格を取得～

平成28年6月2日（木）に本学独自の認定資格である「健康づくり運動サポーター」（以下、健サポ）の認定証書授与式を開催しました。今回は平成27年度に養成講座と実習を終え、4月の審査会で資格を認定された初級32名、中級1名の計33名に対して、認定証書が授与されました。

今回初級資格を認定された学生からは、「今回の実習を通して、コミュニケーションで大切なことは相手の気持ちを考えることであることを参加者との触れ合う中で知った。今後も、地域の方々の健康づくりのお手伝いができるように中級取得を目指して頑張りたい」等の感想が述べられ、学生が実習を通して学びを深めたことが伺えました。

今年で9年目を迎えたこの健サポ養成は、これまで延べ474名が資格を取得しました。各授業で得た専門知識をアウトプットし、学びを深める場として、地域での現場実習は非常に有効であると考えています。今後も多くの学生が本資格の取得に励めるよう、全力でサポートしていきたいです。

（報告：新助手 齋藤まり）



サポーター資格を取得した学生たち

## 花いっぱい運動に柔道部員が参加



柔道部員と女性部の皆さん

6月1日（水）に柴田町商工会女性部が主催する「花いっぱい運動」が行われ、本学柔道部の女子部員11名が参加しました。当日は船岡駅前設置されているプランターの土の入れ替え作業やベゴニアの花の植栽作業を行いました。

この運動は船岡駅前をきれいな花でいっぱいにし、地域住民や観光客の心を和ませようと約30年前から続けている取り組みです。

柔道部は昨年参加しており、今年の秋にはボタンやビオラを植栽する予定になっています。

運動を主催した志b太町商工会女性部の大槻会長は「みなさんのおかげで船岡駅前がとてもきれいになりました。ありがとうございました。」と柔道部員の労をねぎらっていました。

柔道部員はこれまでもまして地域住民とのつながりを深めることができましたようです。

（報告：学生生活室）

## 第四体育館に「バレエバー」を導入

このほど、第四体育館に「バレエバー」が導入されました。バレエバーとは新体操競技のトレーニングに用いられる器具で、バーを使用しながらトレーニングを行うことで、身体の細部への意識付けや体幹を鍛えることが可能です。このバレエバーを用いたトレーニング方法は約350年の歴史がある伝統的なトレーニングなのだそうです。

今回導入したバレエバーは新体操競技部の部活動での使用はもちろん、「ダンスⅠ」や「新体操」の授業でも使用されています。また、「みやぎジュニアトップアスリートアカデミー事業」や公開講座として行われている「ジュニア新体操教室」などでも使われており、学生だけではなく、地域の子どもたちも広く使用可能な器具となっています。



バレエバーを使った授業の様子

## 中国青海省体育科学研究所との国際交流に関する協定書調印



青海省帯域科学研究所の皆さんと本学関係者

平成23年3月7日付けで締結していた「日本国私立仙台大学と中華人民共和国青海省体育科学研究所との間における国際交流に関する協定書」の有効期間満了に伴い、これまでの協定内容と同じくして新たに契約を交わしました。調印式には楊海宁青海省体育局副局長、馬福海青海省体育科学研究所所長はじめ青海省より4名、本学からは阿部学長、荒井国際交流センター長、馬講師、金講師、西塚事業戦略室長の5名が出席しました。馬福海所長と阿部学長が協定書に署名し、両機関の更なる交流の発展を確認しました。

(報告：事業戦略室)

## タイ シーナカリンウィロート大学より教職員来訪

6月13日にシーナカリンウィロート大学（タイ）より Supranee Kwanboonchan 体育学部長、Aotip Ratniyom 経済公共政策学部長、Sirinoot Teanrungrroj 理学部長、Wanee Aujatid 人文学部長ほか3名が交流促進および本学に派遣している留学生との面談のために来訪されました。同大学は教育単科大学が前身の国立大学であり、体育学部とは本学からの交流打診により平成19年に交流が始まりました。13日に行われた国際交流会議ではシーナカリンウィロート大学より体育学部以外の学部の紹介もされました。今後他学部の学生も短期留学生として本学へ派遣したいとの意向を受け、阿部学長より歓迎する旨が伝えられました。翌日には仙台を發たれ、一行は筑波大学、明治大学を訪問し、18日帰国の途に就かれました。



シーナカリンウィロート大学の皆さんと本学関係者

(報告：事業戦略室)

## 台湾 台東大学より教職員来訪



台東大学の教職員と本学関係者

6月29日に台東大学（台湾）より梁忠銘教育学部教授を団長に、范春源体育学部長ほか5名の体育学部関係者が来訪されました。台東大学から本学には現在、学部では1年留学の3名と2年留学（ダブルディグリー制度）の2名が、大学院では3名の台東大学卒業生が学んでいます。本学からも毎年3月に1ヶ月間短期留学生を派遣しており、昨年・一昨年に台東大学へ留学した本学学生4名も台東大学からの留学生8名と共に一行を迎えました。本学滞在中は留学生との面談、学内施設見学、また教職員との交流を深める時間を過ごされました。一行は同日の16時より学食なちゅらにて行われたリオデジャネイロオリンピックへ出発する南條先生・大元選手の壮行会にも特別来賓として出席され、梁団長より激励の言葉

とお二人の活躍を願って台湾の金門島で高粱から作られた「白酒」が送られました。一行は翌朝には関西に向かわれ、台東大学の他協定校を訪問されました。

(報告：事業戦略室)

## 横川 和幸 仙台大学元教授からの報告～ミャンマーで陸上競技を指導～

新年度を迎え3ヶ月が経ち新入生も仙台大学の雰囲気慣れてきたことと思います。当方もミャンマー（ヤンゴン）に着任して100日が経ちました。しかし、いまだに暑さや食べものに適応できていません。連日45度の暑さは何と表現したらいいのか？

現在の仕事は「INSITUTE OF SPORT PHYSICAL EDUCATION」（保健・スポーツ省）でコーチ達に基本的なトレーニングを指導しています。この施設はイギリス領の時の競馬場を利用し20年前に設立されました。広さは146エーカー（約58万平米）、とても広く自転車やバイクがないと各施設への移動には時間がかかります。現在33競技、コーチ約80名、学生数は約750名です。ビリヤード、スカッシュ、ウシュ（ミャンマーの格闘技）、セパタクローなどがあり面白く見えています。

ミャンマーには、現在体育大学がなくコーチ達は自分の経験やインターネットを頼りに指導にあたっています。そこで、基本的なトレーニング8つを設定して（コーディネーショントレーニング、プライオメトリックトレーニング、コンディショニングトレーニングなど）ワークショップを行っており、コーチ達は興味深くこのワークショップに参加しています。（スマホ片手に各種運動を録画しています）

先日は、保健・スポーツ省の要請で首都ネービドー（ヤンゴンから北へ約330km）で同様のワークショップを行ってきました。ワークショップは「ゴールド・キャンプ」という東南アジア10か国大会を開催した時に作られた施設で行いました。その時の情報として、間もなく国立の体育大学ができると言うことをうかがいました。既に建物ができていますが、付帯施設が未だのようです。しかし、ゴールド・キャンプ内に素晴らしい競技施設が充実していますので当面はその施設を利用するとか。

間もなく雨季に入ります。「雨季に鬱になる」と云われていますが何とかその時期を乗り越えたいと思います。

（報告：横川和幸 元仙台大学教授）



研修終了後の集合写真



ゴールドキャンプの陸上競技場

## 第7回仙台大学体育祭開催



今年で第7回目となる体育祭が、5月28日（土）に第五体育館を会場に、1年生チームや留学生チームなどが参加し開催されました。

開会式で阿部芳吉学長から「2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、ぜひ本学の学生から活躍する人材を生み出していきたいし、皆さんにはその可能性が十便にあります。今日は学生間の交流・親睦が目的なので、競技を精いっぱい頑張ることはもちろん、仲間との親交を深めてほしい。」とご挨拶をいただきました。

体育祭は特に入学間もない1年生同士の親交を深めることを目的に毎年この時期に学友会が主催し開催されています。

（報告：学生生活室）

## 中国国費留学 上海体育学院 修士課程修了

中野 拓也さん(平成24年体育学科卒)

～最も優れた留学生に与えられる「榮譽証書」も授与される～



6月28日(火)、国際交流提携校の中国上海体育学院の国費留学生として1年間の語学研修後、3年の修士課程を終え、朴澤理事長・学事顧問、阿部学長をはじめ国際交流センター教職員などへの報告のため、中野拓也さん(平成24年体育学科卒)が大学へ来訪しました。

中野さんは上海体育学院の修了証書と共に、大学内外での積極的な活動やスポーツなど顕著な成績が認められ、留学生の中で最も優れた留学生与えられる称号「榮譽証書」も授与されました。球技大会ではサッカーチームのキャプテンを2年連続で務め優勝に貢献、校内の歌の大会で中国国内で流行するチャイニーズポップスを披露したりと積極的に留学生活を送ってきたそ

うです。

大学へ来訪した同日は、仙台大学大学院修士論文中間発表の日でもあり、後輩たちの学びの成果などを聴講しました。上海体育学院から本学大学院修士課程に留学中の吳雪(ごゆき)さんは、彼女が仙台大学へ留学する際に、食事や文化の違いなどの様々な不安の相談を中野さんがアドバイスしていたことから特に印象に残ったそうで、「修士論文の中間発表では日本語の習得もかなり上達し、論文の内容も素晴らしい内容であったと思う。彼女の日本での努力の姿が見れてとても嬉しかった」と話してくれました。

中野さん自身、上海体育学院では、主にスポーツマネジメントの分野を学び「上海申花サッカークラブチームとベガルタ仙台の経営モデルの比較について」をテーマに修士論文を書き上げました。

また中野さんは、社会人サッカーのチームメイトだった日本人の上海支社長に誘われ、すでに日本の貿易会社に就職が決まっており、東京本社での7月1日からの研修を経て10月以降は上海駐在員として勤務するそうです。

中野さんは留学生活を振り返り、「ほんの少しの勇気と行動が今に繋がっている。日本の強みと弱みなど、海外に出て初めて感じる。人生の中で貴重な体験をしたと思っている。仙台大学を通して出来る留学のチャレンジを、せずに終わらせるのはもったいない。」と後輩たちへのメッセージを残してくれました。



上海体育学院に留学している仲間とともに  
左から菊地さん、中野さん本人、石橋さん



修了生とともに



博士課程(スポーツ医学系)へ進むガーナ人のルームメイトは3年間同室で、かけがえのない親友

## 第9回七十七銀行陸上競技記録会(チャレンジ2016)を初めて共催

6月4日(土)、仙台市陸上競技場で第9回目となる七十七銀行陸上競技記録会(チャレンジ2016)が開催され、仙台市陸上競技協会とともに、仙台大学が初めて共催者の一員として、名を連ねました。これは、名取英二准教授の本学教員就任に伴い、これまで同氏が七十七銀行陸上競技部指導者として、長年、宮城陸上界の振興を図るべく実施してきた同銀行主催の記録会の運営について、体育系大学の仙台大学も同じ趣旨を担う一員として位置づけて頂くことになったことに伴うものであります。そして、この記録会の特色は、トップアスリートのみならず参加者の誰しものが、自らの記録を公式のものとして確認することができる点にあります。



好天のもと、200名を超える県内各地の中学生から成人までの参加者を前に、氏家七十七銀行頭取が、仙台大学も共催に加わったことを紹介され、緑色の統一ユニフォームを身に纏った本学陸上競技部の部員達も、晴れがましく、この紹介の栄に浴しました。

今回の記録会では、七十七銀行陸上競技部の新監督の専門種目であるやり投げ競技から、村上幸史選手(アテネ、北京、ロンドン五輪の各日本代表)と北口榛花選手(2016世界ジュニアランキング1位)の2名が、七十七銀行陸上競技部部員とともに参加し、花を添えました。

くしくも、来年の第10回記念記録会は、本学の開学50周年にも当たっており、今回は本学における近隣地域の中学生陸上大会のお世話と重なったため陸上競技部の分散参加となりましたが、今回は、本学陸上競技部員全体の参加により、宮城陸上界の振興という使命に対して、共催者としての本学の貢献が目に見える本格的体制で対応することにより、大きな節目を経過したいと感じた次第であります。

(報告：朴澤 泰治 理事長・学事顧問)

## 第26回仙台国際ハーフマラソンに参加して



大会に参加した岩田准教授と只野予算管理室長

2016年5月8日(日) 午前10時05分スタートの号砲が鳴り響き、同時に打ち上げ花火が白煙を上げ1万3000人余りのランナーが青葉茂る青葉通り、定禅寺通り、美術館、博物館等の街並みを走り、国内有数の自然景観と都市景観が調和した風景が人気スポットを、爽やかに五感をフルに生かしながら距離を稼いでいました。

今年の参加申し込み状況からも分りますように、開始から僅か28分で定員となり走る前から大変苦勞する位の大会となってきています。

そのような仙台ハーフマラソン大会に、一昨年より本大学所属の教職員が同じ趣味を共有する者が一緒に走っております。

ランユニホームは、2017年本学が50周年を表したブルーの半袖タイプと赤色のタイプをデザインしているものを着用して走っていますが、今回も見知らぬランナーから背後より声をかけられました。

声がけは、「仙台大学何期生ですか」「私は大阪から来た20期生〇〇です」「開学から50年経つのですね」と言葉を交わしていただき、同窓生が多く走っていることに気付かされ、また、つながりの大切さを感じながら走っています。

このように今では、東北各地で行っているマラソン大会に50周年記念ユニホームを着用して仙台大学関係者及び同窓生にアピールしながら爽やかな汗を掻きながら体にムチ打って走りきっています。

(報告：青沼 一民 教授)

## 訃報

6月10日に担当課長の三浦正和氏のご逝去されました。三浦氏は平成23年11月から管理課(現、営繕管理室)において施設管理、備品管理のプロとしてご尽力いただき、本学の発展に大きくご貢献いただきました。心よりご冥福をお祈りいたします。